

海外事務所だより

パリ事務所

ジャパン・エキスポ出展報告

～自治体のキャラクターを活用した観光PRとJETによる日本文化紹介

パリ事務所所長補佐 森井 重行(東京都派遣)

はじめに

パリ事務所では、7月1日(木)から4日(日)まで、パリ近郊ノール・ヴィルパント展示会場で開催された第11回ジャパン・エキスポに出展し、各地方自治体から提供を受けた観光パンフレットの配布などを通じて日本の地方のPR活動を行いました。

ジャパン・エキスポはポップカルチャーの祭典であり、来場者の多くは10代から20代の若者であるため、彼らの興味を引くために自治体のマスコット・キャラクターを活用し、PR効果の向上を狙いました。結果は大成功で、クレアのブースはつねに人だかりができるほどの人気を博し、4日間のブース訪問者はアンケートに答えていただいた方だけで1,200人を超えました。ブースに立寄ってパンフレットを手にとっていただいた方は2,000人を超えるものと思われます。

フランスには、19世紀中ごろより日本文化に心酔するジャポニズムの伝統がありますが、最近の日本食や日本のマンガやアニメの人気ぶりは新ジャポニズムの時代が到来しているといわれるほどです。今回の出展を通じて、日本のマンガやアニメが大好きな若者たちに、日本の地方や日本文化全体に対して興味を持ってもらい、観光客や留学生として日本に来てもらうことを期待していましたが、その確かな手応えを感じることができました。

ジャパン・エキスポとは？

ジャパン・エキスポの盛り上がりについては、本

誌2009年11月号を始め新聞などでもたびたび報じられているためご存知の方も多いでしょうが、ここで改めて概要を説明しておきます。

ジャパン・エキスポは、日本文化のファンであったフランス人数人が、日本のマンガや伝統文化などを紹介するイベントとして2000年に初めて開催しました。初回の来場者は3,200人に過ぎませんでしたが、年々規模を拡大し、10回目となった2009年には9万5千㎡の会場に500を超える団体が出展し、来場者は16万5千人を数えました。主催団体によると、今年は600を超える団体が出展し、来場者数も昨年を上回る約17万人が来場したとのこと。

現在では、マンガ、アニメ、ゲーム、音楽、ファッションなどのポップカルチャーを中心に、書道、武道、生け花などの伝統文化を含む日本文化をテーマとして開催されるヨーロッパ最大の祭典として広く認められています。

過去には、静岡県、高山市、大阪府・大阪市などが日本の自治体として、ブースを出展したことがあります。11回目となった今年は、日本の公的機関として当協会パリ事務所のほか、4省庁（外務省、文化庁、経済産業省、観光庁）が連携してブースを出展しました。

ブースでの自治体の観光PR等

ジャパン・エキスポの来場者は、24歳以下の若者がおよそ8割を占めています。今回、私たちがブースを出展するにあたり、このような若い来場者に対して自治体の何がアピールできるのかということ



クレアのブース

について懸命に知恵を絞りました。彼らは、日本のポップカルチャーには大いに興味があるけれども、日本の地方についてはあまり知識も関心もないだろうと思われたからです。

そこをつなぐものとして、日本の各地方でまちおこしや観光PRに活用されて人気のあるマスコット・キャラクターを利用しない手はないと考えました。自治体などがつくるマスコット・キャラクターは、その地方を代表する名産品や歴史的人物など地方にゆかりあるものをあしらったものが多いため、愛嬌たっぷりのキャラクターを通じてその地方への関心を惹き、観光名所など具体的な内容を説明することが効果的だと判断しました。

私たちとしては、こうした試みは初めてということもあり、職員の派遣元やフランスと友好都市関係がある自治体などに声をかけ、結果として34の自治体からキャラクター・グッズおよび観光パンフレットの提供を受けました。また、積極的にマンガやアニメを活用してまちおこしをしている自治体や、留学生誘致に意欲的な自治体からもパンフレットを提供してもらい、ブースで情報を発信しました。

ブースには、マスコットのぬいぐるみを飾りポスターを掲示するとともに、自治体の観光PR用DVDを放映しました。法被を着込んだ私たち日本人スタッフが常駐したほか、JET・OBにも手伝いに来てもらい、フランス人の目線で地域の魅力をPRしてもらいました。JETプログラムに応募したいという青年が訪れた際には、即席の相談会が始まりました。

結果が大好評だったことは前に書いたとおりです。基本的にはアンケートに協力していただいた人



アンケートに答える来場者

にグッズを提供していたのですが、我も我もと競うようにアンケートに答えていただきました。4日間で1,209人からの回答を得、提供いただいたグッズおよびパンフレットはほとんどすべて配布できました。

アンケートでは、「日本にいつ行きたいか」という質問には「近い将来」を選んだ割合が最も多く、日本の魅力として「ハイテク」「文化（伝統文化、マンガ）」「日本食」を選んだ人が多かったです。日本を旅行するにあたり心配なことは、「旅行費用」と「言葉（日本語）」という割合が多いのは、同種のアンケートと同じ傾向のようです。

※アンケートの結果は、パリ事務所HPトップ (<http://www.clairparis.org/>) ⇒「国際経済交流活動の支援」に掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

日本政府系機関の連携による 日本文化の紹介

今回のジャパン・エキスポでは、従来にない試みが行われました。主催団体SEFAイベントから、マンガやアニメだけでない本物の日本文化を紹介してほしいという要請が在フランス日本国大使館にあり、無料で300席規模のステージを使用させてもらえることになりました。そこで大使館広報文化部が音頭を取り、当協会、国際交流基金、観光庁、経済産業省（CoFesta）が連携して日本文化紹介イベントを開催しました。

私たちとしては、ここでもJET・OBにご活躍いただくことにしました。日本で生活した経験があり、日本の魅力をよくわかっているJET・OBが、自分の言葉（フランス語）で自分の目で見た日本の文化や



アンドレさんの三味線



ミーカーさんの居合道



ル・ベールさんの高松PR

地域の魅力をPRすることには大きな説得力があります。私たち日本人が見過ごしがちなことまで、彼らには魅力と感じられ、それがフランス人には共感できるようなのです。

7月3日（土）と4日（日）に行われたステージでは、フレデリック・アンドレさん（元埼玉県ALT）による三味線演奏、ソフィー・ル・ベールさん（元香川県CIR）による高松の魅力紹介、そしてイライザ・ミーカーさん（元熊本県ALT）とその同門による居合道のデモンストレーションが行われました。会場は、熱心に演奏や講演に耳を傾け、また演武を注視する観客たちで立ち見も出るほどの大盛況でした。音楽、観光、武道とジャンルは違えど、それぞれに賭ける思い入れは強く、日本人以上に日本文化を愛し実践している彼らの姿に心を打たれました。

この他、国際交流基金の主催による和太鼓演奏やインターネットを活用した日本語教室、観光庁による日本旅行を景品とするゲーム大会、経済産業省CoFestaによるアニメソングのライブが行われ、

いずれも好評を博していました。

おわりに

今回、4日間ジャパン・エキスポに参加して気づいたことは、フランス人は日本文化を心から楽しんでいるということです。ノール・ヴィルパントの展示会場に向かう電車には、好きなキャラクターに扮したフランス人が大勢乗りこんでいますし、会場も浴衣や日本風のファッションで着飾った人ばかりです。ヨーロッパで最も日本文化の受容が進んでいるのはフランスだとよくいわれますが、伝統文化であれポップカルチャーであれ、若者だけでなく30代40代の方も含め、本当に日本文化が広く浸透していることが実感できました。

また彼らは、マンガやアニメなどを通じて驚くほど日本のことをよく知っています。観光をするにしても型どおりの観光地巡りでは飽き足らず、旅館に泊まり温泉につかって布団で寝るという日本の生活を体験してみたいという声が多く聞かれます。私たちが思っている以上に本物志向が強く、日本の文化そのものを享受したいという傾向が窺えます。

このようにジャパン・エキスポの来場者は、日本に何らかの関心があり、すでに日本を訪問したことがある人や近いうちに日本に行ってみたいと思っている人ばかりです。ジャパン・エキスポをポップカルチャーの祭典としてだけではなく、将来の日本へのリピーターや本格的な日本通を育てる機会と捉え、日本の自治体が情報発信の場として積極的に活用することを大いに期待しています。その際は、ぜひクレア・パリ事務所にご相談ください。



海外生活 だより

パリ事務所

フランスで結婚式に出席

パリ事務所所長補佐 垣内 明(堺市派遣)

フランスで結婚式に参加する機会を得ましたので、その様子をご紹介します。

当協会の仕事で知り合い、その後、親しくしていただいているフランス人地方公務員であるA氏から、「娘が結婚するので結婚式に出席してほしい」との連絡をいただき、「結婚する当人の知人でもない私が出席して良いものか?」と悩みましたが、せっかくの異文化体験のチャンスと思い承諾することにしました。

すると、早速、A氏から詳細なプログラムが送られてきました。その内容は次のとおりです。

プログラム

金曜日：20:00～	自宅でのガーデンパーティ（40名程度） （平服にてお越しください）
土曜日：14:00～	市役所での結婚式
14:30～	教会での結婚式
16:00～	カクテルパーティ（250名程度）
20:00～	披露宴（150名程度）
	23:00よりダンスパーティ（翌日午前4時まで）
日曜日：12:00～	ランチパーティ（100名程度） （平服でお越しください）
16:00	閉会

土曜日か日曜日に開催される披露宴に、3時間程出席すればよいと日本的に考えていましたので、3日間にもわたって結婚式が開催されること、出席人数の多さ、午前4時までも披露宴が開催されることにびっくりしました。ただ、当事務所の現地スタッフからは「フランスでは普通よ」と言われ、「プレゼントを忘れないでね」との忠告をいただきました。

日本では、式の当日にご祝儀を持参しますが、フランスでは結婚する当人が選んだプレゼント・リストから自分の予算に合う品を選ぶという方式が一般的なようです（ちなみに、日本でいう引出物のようなものではありません）。

金曜日

さて、金曜日の夕方、A氏のご自宅に到着すると、お庭にテントを張ってガーデンパーティがまさに始まるところでした。「平服にて……」とは聞いていましたが、



ガーデンパーティの様子

そこはあくまでも結婚式の一部なので、それなりの格好をした方が良いと思っていました。しかし、出席者は全員、文字どおりの「平服」でした。近いご親戚、親しいご友人の方々が出席しており、皆が「前夜祭」を気軽に楽しんでいました。

土曜日

いよいよ、本番の結婚式当日です。昨日の気軽なモードとは打って変わって、皆、オシャレして集合です。日本では「歳がいもなく」と言われてしまいそうなカラフルな衣装も見事に着こなしておられます。また、女性の場合、帽子が必需品のようです。そして、皆のお待ちかね、純白のドレスに身を包んだ花嫁様の登場です。

まずは、市役所での結婚式に臨みます。日本では「紙切れ一枚」を役所の窓口に提出するだけで結婚したことになりますが、フランスでは、市長および多くの友人・知人の立ち会いのもと、結婚するカップルが「紙切れ一枚」に署名するという「セレモニー」を行う必要があります。



市役所での結婚式の様子
（中央が市長さん）



朝まで踊り明かします

市役所での結婚式を終えたら、今度は、教会での結婚式です。こちらは、映画等でイメージしていたおりの結婚式でしたが、式の最後に、教会に寄付するための小銭を入れる籠が回ってきました。財布をA氏の自宅において出てきたため、1サンチームも寄付できず、恥ずかしい思いをしました。

その後、各自、カクテルパーティが行われる会場に移動します。250名ものカクテルパーティは、見晴らしの良い高台にあるゴルフ場のテラス付きのレストランを借り切って行われました。

カクテルパーティのあとは、披露宴です。公共の施設（各種イベント等にも使用できる体育館といったところでしょうか）を会場に行われました。食事が一段落したあたりで、日本の披露宴と同様、新郎新婦の友人一同による歌や寸劇などの余興が繰り広げられます。ちなみに、日本のようなお色直しはありません。

そのあと、いよいよダンスパーティの始まりです。まずは新郎新婦とA氏夫妻によるワルツからスタートです。ロックまでいろいろな曲がかかり、老若男女、皆が上手に踊っています。後日、A氏に「ワルツを踊れるなんてすごいですね」と言ったら、披露宴で踊るためにダンス教室に通ったとのこと。ダンスなどできない私は、自席から皆の様子を見ていましたが、私のような者のためにDJさんは気を利かせて、要所要所で、全員が輪になって踊るような曲も流してくれます。深夜2時くらいになると、ぼちぼちと帰る人が出てきます。最後は、新郎新婦とごく親しい友人のみがダンスを続け、結局、朝の5時過ぎにお開きとなりました。

日曜日

その翌日（といいますか、午前様だったのでその当日）、披露宴と同じ会場で、ランチパーティが始まりました。こちらも、皆、文字どおりの平服での出席です。簡単なビュッフェ形式の食事と新郎新婦の友人による余興のあと、またもダンスが始まりました。

そして、予定どおり16時頃に閉会を迎えたあと、皆で片づけが始まりました。手分けして、テーブルや椅子を畳んだり、床を掃いたり、新郎のお父さんが司令塔となって男性陣は足場を組み、高い天井部分に施していた飾り付けを取ったりと、皆がテキパ

キと働きます。

公共の施設を使っただけの披露宴だったこともあると思いますが、新郎新婦の両親も含め、親戚や友人による「手づくり」の披露宴だったことにびっくりしました。

日本のように、披露宴の最後に、涙、涙の「お世話になった両親への手紙」の朗読もなく（嫁ぐという考え方がないからでしょう）、終始、笑顔、笑顔で、新郎新婦と一緒に出席者全員が肩肘張らずに楽しんでいるという印象を受けました。



日曜日も踊り続けます



最後のお片づけ（足場にのっているのが、新郎のお父さん）

フランスの結婚事情

フランスでは、このような結婚のほかに、PACS（連帯市民協約（パックス））という制度があります。これは、共同生活をする2人（異性間・同性間を問わない）が結ぶ契約のことで、結婚が認められない同性間のカップルを法的に認知し、相続権などを保障する制度として1999年に施行されました。さらに、2005年には法改正があり、税制上の優遇措置が結婚した場合とほぼ同じとなっています。

結婚との大きな違いは、離婚に相当する契約解消手続きが容易なことです。離婚をするには、弁護士をたてて調停手続きをとる必要があります、日本と比べ時間とお金がかかりますが、PACSの場合、どちらか一方の意思だけで契約を解消することができます。

最近では、このPACSを選択するカップルが増えており、PACSを選択したカップルは、2008年には前年比で4割増、2009年には前年比2割増の17万5千組となっており、結婚もしくはPACS契約を交わしたカップル全体の約4割ものがPACSを選んでいきます。

今後もPACSを選択するカップルの割合が増え続けるのかどうか、これからの動向を注視していく必要がありますが、それぞれのカップルのライフスタイルに応じて、結婚するのか、PACS契約を交わすのか、各自が選択していくのでしょうか。市民のライフスタイルや生活感が多様化している今、複数の選択肢が制度として整備されていることは、日本においても参考になると思います。